真宗保育における保育者と子ども
―真宗教義学の視点から―
（要旨）

京都女子大学 発達教育学部
黒田 義道

1. はじめに

まことの保育（真宗保育）に関する発表者の主たる関心は、保育者とその保育を受ける子どもとの関係にある。保育とは保育者と子どもとの間で行われる営みであり、両者の関係は重要である。しかし、結論が当然の事柄の確認となることもあってか、管見の限り、親鸞の言葉に基づいてこれを学術的に考究した研究は多くはない。

そこで本発表では、まことの保育において、保育者とその保育を受ける子どもとの関係について、教義的に確認することを目的とする。特に親鸞の述べる信心の利益と伝道に着目して考察を試みたい。

2. 親鸞が示す信心の利益と伝道

親鸞の示す信心は、本願力回向（他力）の信心である。その信心の利益について、親鸞には「入正定聚の益」を中心に十種に開いた現生十益の説示がある（『教行信証』「信文類」、『註釈版』p.251）。これらの利益のうち、伝道の観点から特に注目される利益は、「知恩報徳の益」「常行大悲の益」である。

現生十益の内容が具体的に示されるとされるのは、『教行信証』「信文類」の真仏弟子釈である。親鸞はここで、真仏弟子（信心を得た念仏者）のすがたとして、念仏を勧める人（大悲を行ずる人）といい、また、阿弥陀仏をほめたたえて、その慈恩に報ずる人と示している。

注意すべきは、これらが信心の利益である点である。つまり、これらは本願力によって信心の行者に恵まれるすがたであるということである。真宗の伝道は、他力の信心を得た者に本願力に促されて生じるのである。こうした伝道とは、決して自己を上位に置いて、その信仰を未信の他者に強いるものではないのである。

ところで、「まことの保育」課程では、次の四つを保育の目標としている。すなわち、「①阿弥陀さまをおがむ子どもを育てる　②ありがとうと言える子どもを育てる　③お話しをよく聞く子どもを育てる　④なかよくする子どもを育てる」である（本願寺派保育連盟教育原理委員会編『真宗の教えとまことの保育』本願寺派保育連盟、2014 年、p.32）。

この目標は四カ条の「浄土真宗の生活信条」をもとに設けられている。まことの保育が直ちに真宗の門徒（信者）養成を目的としているとは言えないにしても、ここで示される子どものすがたは、浄土真宗の門徒の姿に重なるものである。それを身につけることを目標としている以上、まことの保育には、伝道的側面があると言わなければならない。それは当然、信心を得た者によって行われることが理想である。

3. 親鸞の子育ての姿勢

親鸞には少なくとも 6 人の子があったと考えられている。親鸞の妻・恵信尼による『恵信尼消息』からは、その子どもたちの信仰の一端を見ることができる。それによれば、たとえば信蓮房は不断念仏を行おうとしている様子が知られる（『註釈版』p.826）。これは親鸞の信仰に照らせば違和感がある。また覚信尼は、少なくとも親鸞往生の時点では、親鸞の往生に不安を懐いていたと指摘されている。つまり子どもたちの信仰は親鸞と同一ではない。大人になった親鸞の子どもたちの様子を窺う限り、親鸞には自身の子どもたちに、自らの信仰を強いた気配は感じられない。

親鸞においては、親も子も阿弥陀仏の本願力によって救われるよりほかないのであって、親は子の救い主ではない。親鸞は自身の子どもたちに対して、自身の信仰を語り、その生活を見せつつも、それを受け入れるか否かは、究極的にはそれぞれの子の問題であると受け止めていたと推察できる。

4. まことの保育における保育者と子ども

こうした親鸞の姿勢をまことの保育における保育者の姿勢になぞらえて考えるならば、まず保育者に求められることは、まず自身が信心を得ることである。

親鸞によって明らかにされた阿弥陀仏の教えを聴聞することを通して、阿弥陀仏によって照らし出された自己のすがたが、煩悩に縛られた凡夫である現実を受け止め、保育者として、さらには一人の人間としての自己を振り返ることも言える。人間を深く見抜く阿弥陀仏の確かな智慧を仰ぐすがたが、他力の信心を得た念仏者のすがたである。言い換えれば知恩報徳・常行大悲のすがたである。

まことの保育においては、このような姿勢が、子どもたちにわっていくことが期待されるのである。

およそ以上の内容を構想している。なお、発表者の専門は真宗学である。保育やその現場に疎く、必ず不備があるはずである。諸先生方のご叱正を仰ぎたい。